



乳幼児期の母子コミュニケーションからみた両義性と両価性

小林 隆 児*

1. はじめに

本誌特集の編者らの意図を察するに、小生に課せられたテーマは、乳幼児期早期の母子コミュニケーションにおいて、「自己-他者」「子-(母)親」関係がどのような形で展開するのか、その具体的な姿を描き出すことにあろうかと思う。

最近、筆者は拙著『自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—』¹⁾と『自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—』²⁾を著し、自閉症の生涯発達にわたる治療論の骨格を論じた。前書では、対人関係ないし社会性の成立基盤となっている乳幼児と養育者（多くの場合、母親であるが）の間のコミュニケーションがなぜ成立困難であるのか、どのような介入と援助によって、コミュニケーションが育まれていくかを論じ、後書では、乳幼児期早期の母子コミュニケーションの破綻が青年期・成人期にみられる自閉症の行動障害へ発展していく様相とその治療介入について論じている。特に後書で論じた自閉症にみられる行動障害は、発達障害の有無という相違はあるにし

ろ、昨今の青年にみられる行為障害と極めて近似した内容を含んでいる。自閉症にみられる行動障害の成り立ちを、乳幼児期早期の母子コミュニケーションの破綻と、それによって生じる関係障害の悪循環が拡大再生産されてゆく過程とみなす立場から、筆者は本テーマについて考えてみたい。

2. 母子コミュニケーションを 考えるにあたって

1) コミュニケーションの定義

ここでは、コミュニケーションを、通常考えられている「社会生活を営む人間の間に行われる知覚、感情、思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」(広辞苑、第4版、1991)という情報のやりとりを中心としたものではなく、「存在するお互いの一方が他方に何らかの影響を及ぼすこと」³⁾と定義してみようと思う。そもそもコミュニケーションはその最小単位である二者関係を考えてみても、当事者双方が様々な次元でもって影響し合って成立しているとみなさなくてはならない。情報のやりとりの次元のみではなく、自己あるいは他者の存在自体が、暗黙のうちに相互に影響を及ぼし合うということを考慮することが、コミュニケーションの実態そのものに迫るためには、殊の外重要であるからである。

Ambiguity and ambivalence in the communication between infants and their mothers

*東海大学健康科学部社会福祉学科

[〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台]

Ryuji Kobayashi, M.D. Ph.D.: Department of Social Work,
Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai,
Isehara-shi, Kanagawa, 259-1193 Japan.

2) コミュニケーションは二重の構造を有する

コミュニケーションは先に述べたような情報のやりとりという象徴水準の形態、すなわち象徴的コミュニケーション symbolic communication がある。ことばをはじめとする象徴機能を有するなんらかの媒体が用いられ、それを介してコミュニケーションは展開している。しかし、コミュニケーションはそのような次元のものばかりではない。そのような媒体を介さない、お互いの気持ちが通底するという情動水準のコミュニケーション、すなわち情動的コミュニケーション affective communication がある。ことばをいまだ獲得していない乳児と養育者の間で展開している世界ではまさにこの種のコミュニケーションが中心的役割を担っている。

3) 象徴的コミュニケーションと情動的コミュニケーション

象徴的コミュニケーションの世界では、インターネットに代表されるように情報が一方から他方へと双方向性を持ち、多少の時差を伴って双方に伝達される。しかし、情動的コミュニケーションの世界は、同じ振動数の音叉同士の、一方を振動させると、他方も同じように共振する現象と似通った性質を持っている¹¹⁾。情動の世界は当事者双方の身体が共鳴し合い、そこでは一瞬のうちに一方の情動は他方に通底する。このような情動の共鳴（共振）は、今日では脳科学の世界でもよく知られるようになってきた^{9,12)}。コミュニケーションは、このような性質の異なった二重構造を有している⁹⁾（図1）。

4) コミュニケーションの二重構造と意識の介在の有無

象徴的コミュニケーションは、言語中枢を中心とする左半球の意識的水準による営みであるのに比して、情動的コミュニケーションは、右半球で特に発達した大脳辺縁系が深く関与し、意識的に気づくことのできないものである¹³⁾。一見われわれにとって、コミュニケーションは意識的に行わ

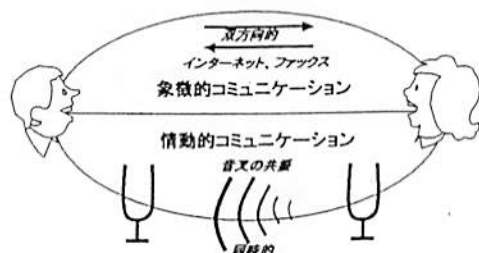


図1 コミュニケーションの二重構造

れるものとみなされがちであるが、その実態は、意識の介在しない無意識の水準で相互が深く影響を及ぼし合っている。意識の介在の有無の二重性を有しながらコミュニケーションが展開しているところに、コミュニケーションの困難さや複雑さの源があるといってもよい。

5) 情動的コミュニケーションと愛着形成

情動的コミュニケーションは、ヒトの発達過程において、象徴的コミュニケーションの成立の基盤として、乳幼児期早期に急速に深まっていくが、そこで重要な役割を担っているのが愛着 attachment である。乳児と養育者の愛着関係は、第一次間主観性 primary intersubjectivity¹²⁾から第二次間主観性 secondary intersubjectivity¹⁴⁾の成立の過程で、急速に深まっていくが、ここで養育者が子どもの情動に調律を合わせた関与のもとで、相互の情動が共鳴し合うような母子間の情動的コミュニケーションが展開していく。母子間の愛着形成がなんらかの理由によって破綻をきたすと、情動的コミュニケーションの成立はきわめて困難になる。環境側の要因が深く関与するものとしては、虐待¹⁰⁾が、個体側の要因が大きいと考えられるものとして、自閉症を初め育てにくい子どもの事例⁹⁾が、その代表的なものである。

3. 人間存在の抱える根源的両義性

先に述べた愛着を求める行動は、本来人間に備わった本能的行動であるが、このように人間は、他者と繋がり合いたいという欲求（整合希求性）とともに、他者とは別の存在として自分で思い通

りに自己実現を図りたいという欲求（自己実現欲求）を併せ持っている⁹⁾。このような相矛盾するような欲求を人間は本来ともに有しているところに、人間存在の抱える根源的な両義性 ambiguity を見て取る必要がある。このような欲求は人間の行動を無意識に規定し、その結果、人間同士のコミュニケーションは、複雑な様相を呈することになる。コミュニケーションの二重構造と人間の持つこのような両義性は、コミュニケーションの成立過程に深く関与している。したがって、コミュニケーションの問題は、情動、欲求など、意識化することの困難な水準の問題を抜きに考えることはできない。

4. 「自己-他者」「子-(母)親」「受動-能動」—共軛的關係—

「自己」と「他者」の関係を考えてみると、すぐにわかることであるが、「自己」とは何かを概念規定しようとするれば、必ず「他者」に言及せざるをえなくなる。このように一方を規定するためには、必然的に他方を取り出さざるをえないような二つの項の関係を共軛的な関係という⁹⁾。「子ども」と「親」、「受動」と「能動」なども同じような性質を持つ関係である。

この種の二項関係のように、共軛の関係にある双方の項は、各々が独立して単独に規定することができない。では両者はどのような関係にあるのかを、実際の母子コミュニケーションの内実に迫りながら、考えていきたい。そこで筆者が試みている自閉症に対する母子治療⁹⁾の中から具体的に自験例を取り上げて考えてみよう。

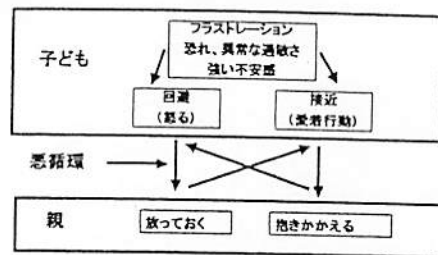


図2 接近・回避動因的葛藤の悪循環⁹⁾

1) 「抱く-抱かれる」

事例 史郎（仮名）(文献3, 第2の事例から)

4歳9カ月時から母子治療を開始した事例である。開始直後顕著であった史郎の強い接近・回避動因的葛藤⁹⁾ (図2)を緩和することによって、史郎は次第に母親に対する愛着欲求(緊合希求性)を強め、さかんに愛着行動を示すようになった。母子間の良好な情動調律によって情動的コミュニケーションは日に日に深まっていっていったが、史郎が母親のみならず、父親や1歳上の姉にも盛んに接近しては自己主張やちょっかいを出すようになっていった。すると特に姉は嫌がり、史郎に対して攻撃を加えたり、拒否したりするが、このように姉に嫌なことをされると、史郎はきまって母親を叩き、引っ掻いては自分の怒りを母親に向けていた。

そのような中で治療開始から5カ月ほど経過したある日、母親はついに絶えきれず、史郎の胸の中で泣くまねをすると、母親が日頃してやるように、史郎が母親をきつくしっかりと抱きしめてくれた。ただ、この時の母親には、史郎がまるで自分の気持ちを鎮めているように感じられたという。(文献3, p.186)

ここで認められる母子コミュニケーションのエピソードは、コミュニケーションの持つ両義的な側面をわかりやすく示している。

史郎は、痛みを訴える母親を慰めるかのようにして母親を抱いていたが、母親には、逆に史郎の方が母親に抱かれて、自分の気持ちを鎮めているように感じられている。実際に行動面で抱いているのは、史郎の方であったが、気持ちの中では母親が史郎を抱いて慰め、史郎は母親に抱かれて慰められていたのである。

史郎がこのような行動をとった背景には、自分が痛い思いやつらい思いをした際に、母親にしっかりと抱きしめてもらったという心地よい情動体験があり、この時のエピソードでは、おそらく史郎にその心地よい情動体験が想起され、それが引

注) 自閉症をはじめとする非常に過敏で不安の強い子どもは、強い欲求不満、恐れ、不安感を抱きやすい傾向をもち、回避欲求が非常に強いために、接近行動を起こしても、いざ親から抱きかかえられそうになると回避行動が誘発され、さらに回避行動を起こして親から放置されると接近行動が誘発されるという悪循環を繰り返す。そのため両者間に愛着関係が容易には成立しない。このような特徴を持つために、愛着形成が困難となるのである。

き金となって、史郎は思わずこのような行動をとることになったのであろうと推測されるのである。

行動の水準と主観の水準を含めてここにみられる母子コミュニケーションの様相を図示したものが図3である。行動水準では史郎は母親を抱いているが、主観的には母親に抱かれ、その逆に母親は行動水準では史郎に抱かれつつも、主観的には史郎を抱いているという関係である。「抱く」という能動的な行為の背景には「抱かれる」という受動的な行為が潜んでいることがうかがわれる。ここに、コミュニケーションを行動水準のみではなく、主観の水準にも踏み込んで捉えていくことの重要性が示唆されている。

この例でわかるように、対人関係において「握る-握られる」、「抱く-抱かれる」、「触る-触られる」場合のように、二者の身体が直接接触し合うことによってお互いの感受機能の能動性と受動性が交叉する時には、どこまでが自分でどこからが相手かを明確には分けることはできない。二者間の身体と身体が相互に浸透し合うという関係にあるということができるのである。

図3に示された二者間交叉モデルは、鯨岡が、これまでのコミュニケーション研究がもたらした行動水準で二者間相互作用モデルを基本に行われてきたことを批判し、関係発達において提唱したものであるが⁹⁾、この事例にみられる史郎と母親の関係性の特徴は、二者間交叉モデルによってとてもよく描き出すことができるように思う。

2) 「成り込み-取り入れ」

事例 翔太(仮名)(文献3, 第1の事例から)

3歳3カ月時から母子治療を開始した事例である。史郎と同じく、開始直後顕著であった強い接近・回避動的葛藤が治療介入によって緩和し、翔太の愛着欲求の顕在化とともに、母子間の愛着関係は急速に深まっていった。

治療開始から16カ月経過し、彼は次第に自己主張も盛んになり、情動的コミュニケーションから象徴的コミュニケーションへの過渡的段階と思われる状態に入っていた。この頃起こった翔太と母親との間のコミュニケーションのあるエピソードである。

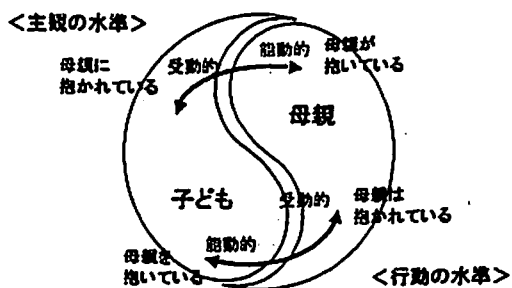


図3 二者間交叉モデル(両義性モデル)(文献6を採用)

数日前から朝起きるとすぐに母親に「(何かを)トッテ」と要求することが多くなってきた。母親にしてみると何をとりもってもらいたいのか、本人の好みがいくつかあるので想像できるのであるが、何かははっきりとはわからない。そのため時折違った物を持ってくるとひどく不機嫌になってしまう。自分の希望の物を持ってきてもらうととてもうれしそうに反応している。ではどうして何を持ってきてほしいと明確に言わないのか、言えないのだろうか。日頃ほしい物に対して何らかの表現方法は身につけているのであるから言ってもよさそうなのだが、それを母親に直接的に言わない。なぜなのか母親は首を傾げている。(文献3, p.118)

同じようなエピソードが先の史郎の事例にも認められている。

事例 史郎

治療も順調に経過し、母子コミュニケーションは一段と深まっていたが、治療開始からはほぼ1年ほど経過した頃の母親が書いた日記には以下のようなエピソードが記されている。

……絵を描いて、自分が何を描いたか、私に言わせようとする。絵を指さして、私の方を向いて「言って」というふうにし少し催促する声を出す。目を見ても「これはなんだ?」と「言ってみて!」という気持ちがよくわかる。すぐにパッと答えてあげられれば大満足で安心する。でも、時々忘れしてことばにつまることもある。そんなときは、小さな声でそっと頭文字のことばを教えてくれる。「パーキング」なら「パ」、「プリンスホテル」なら「プ」、頭文字がはっきり聞こえず、こちらがわからないと、すごく怒る。1日に数回は怒らせてしまう。たまに、途中で私がわかって正解を言うと、パッと目に涙をためながらも笑ってくれて落ち着く。切り替えは早い。(文献3, p.208-209)

ここにみられる母子コミュニケーションの様相は、子どもと養育者のコミュニケーションが深まり、情動的コミュニケーションから象徴的コミュニケーション、つまり情動が通底し合うというコ

コミュニケーションから次第にことばを媒介としたコミュニケーションへと進展していく際の過渡的段階にみられるひとつの特徴をよく示している。

ここで認められる現象はたしかに両者間にことばが介在してはいるが、ことばそのものがコミュニケーションの媒体としてはほとんど機能していない。子どもが今心に抱いている内的表象を、母親が子どもの気持ちに成り込み⁹⁾、子どもの内的表象を想起することによって、母子はある内的表象を分かち合うことが可能になり、そのことによって両者間で大きな喜びを分かち合っている。彼ら自身の中に浮かんだ内的表象の世界を母親にことば（親が身にまとったことば文化）で語ってもらい、自分の内的表象と大人のことば文化の世界とが重なり合うことに大きな喜びを抱くことができたと筆者には思われる。

ではここでなぜ彼らは母親に自分の欲しい物を、あるいはわかってもらいたいことを、心に思い浮かべているにもかかわらず、ことばでもって伝えようとしなかったのであろうか。明らかに母親が自分の気持ちを分かち合ってくれているか否かを試しているように見える。ここに「(母)親(育てる者)-子(育てられる者)」という非対称的關係におけるコミュニケーションの過渡的段階でのある特徴を見て取ることができるように思う。

ことばによるコミュニケーションという文化的な営みは、育てる者にとっては至極当然の自然な行為であるが、ことばの獲得過程のいまだ途上にある子どもにとっては、ことばは自ら自由に操ることのできるような道具ではない。しかし、ことばを獲得して大人文化の仲間入りをしたいという欲求（自立したい欲求）を持つがゆえに、子どもは母親を自らの方に引き寄せて、母親に自分の内的表象をことばで語ってもらうことが、大きな喜びとなっている。母親に依存しながらも、ことば文化を取り入れたいという欲求をも同時に実現している。依存（整合希求性）と自立（自己実現欲求）の欲求が深く錯綜しながら展開している母子コミュニケーションの一面を見る思いがする。

筆者はここにみられる母子コミュニケーション

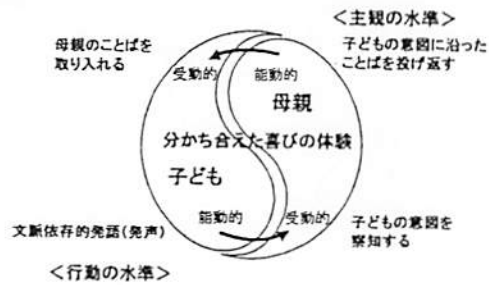


図4 分かち合いコミュニケーション（文献6を援用）

の様相を、「分かち合いコミュニケーション」(文献3, p.242)と称して、情動的コミュニケーションから象徴的コミュニケーションへと移行する過渡的段階でのコミュニケーションとして抽出し、図4のように描き出した。

この過渡的段階のコミュニケーションは、お互いが自分の意志を相手に何らかの媒体を通して「伝え合う」という形態ではなく、お互いの内的表象を「分かち合う」ことを一義的な目的としたものだともみなすことができる。このようなコミュニケーション段階の存在は、子どもに言語的働きかけをする上で非常に重要な意味を持っている。まずは養育者（治療者）が子どもの心の中に浮かび上がった内的表象（体験の共有に基づく）を感じ取って、それをわれわれの文化の側に引き寄せてことばでもって表現してやることによって、子どもは自分の世界が養育者の世界と繋がり合った（整合希求性）という実感を持つようになり、それが子どもにとって大きな喜びとなる。このような質のコミュニケーションは愛着形成を基盤として成立する情動的コミュニケーションの世界の充実があって初めて可能になるのである。

この「分かち合いコミュニケーション」においては、養育者の果たす役割は、子どもの気持ちに沿うという受動性ととともに、子どもの気持ちに沿いながら（成り込みながら）自らの判断でもって投げ返していくという能動的な関与が要求されているのであって、ただ単に子どもに合わせるという受動的な営みではけっしてない。ここに養育者の主体性が問われている。相手に合わせながらも、能動的、主体的に関与するという、受動的

でありながらも能動的でもあるといえる両義的関与をここに見て取る必要がある。

5. 両義性と両価性

これまで述べてきた乳幼児期の母子コミュニケーションにおいて、愛着形成を基盤にした情動的コミュニケーションの成立が困難な事態に陥ると、そこでのコミュニケーションの様相はどのように変化していくかを、次に検討してみよう。

事例 A男（文献2の事例A男より引用）

3歳6カ月時、母子治療を開始した事例である。A男は、一時期育児不安が強まって里帰りした母親との間で、容易にはコミュニケーションが成立しない状態であり、初診時の行動特徴から自閉症と診断されている。

A男は少しずつ治療室の雰囲気にも慣れて、自分の意思をはっきり示すようになってきたセッションでのあるエピソードである。

両親で治療に参加し、両親とも積極的に働きかける様子が目立っていた。マットに転がっているA男を見ると、両親は彼に逆立ちをさせようと働きかけ始める。しかし、その時のA男は母親と一緒に楽しみたいという甘えたような仕草を取っていた。そのような時に母親は「ひとりでやってごらん」と自立を促す働きかけをする。そうかと思えば、明らかに子どもはひとりで遊びたそうにして両親から回避的態度を取っているにもかかわらず、両親ともに過剰に接近して積極的に働きかける。こんな時には日頃扱うことを禁じているような遊びをこっそら勧めている。

この事例では、治療開始時には、子どもの側に接近・回避動因的葛藤が強く認められていたが、介入によって緩和していくと、次第にA男は自分の意志をはっきりと主張するようになり、われわれには彼の行動の意図がとでもわかりやすくなっていた。当初は子どもの側の接近・回避動因的葛藤によって母子間のコミュニケーションがうまくいかないことが多いが、葛藤が緩和して子どもの愛着欲求が行動として顕在化していくと、母子コミュニケーションの様相は一転する。子どもは母親と一緒にいたいという愛着欲求をさかんに行動で示すようになっていく。それにもかかわらず、母親は子どもに自立を促して結果的に子ども

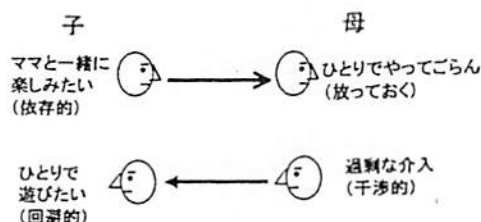


図5 母子間の気持ち（意図）のずれ

を突き放している。

このような関係を幾度となく経験すると、子どもも傷つくことを恐れ、ひとりで何かに没頭しようと試みる。すると今度は逆に母親の方が不安を起こして、子どもに普段はさせたくないような遊びに誘い、一緒に遊ぼうと子どもの機嫌を取るようにして、自分の側に引き込んでいる（図5）。

なぜこのような母子間の気持ちにずれが起こるのであるのか。その背景には、母親自身が乳児期早期から家庭の事情で親戚に預けられ、そこで幼児期をおくったという生活史があった。そのため、母親は幼児期から愛着欲求をいつも抑えて生きていかざるをえなかった。そうした愛着をめぐる葛藤が、現在の子どもの関係において、このような形で再現されているのである。愛着をめぐる葛藤の世代間伝達である。子どもの愛着欲求が高まると、それは双方の間で共鳴することなく、母親は無意識のうちに否認して、子どもを突き放し、自立を促す働きかけをしてしまっている。

このような母子コミュニケーションは、母親自身意識的に行っているわけではなく、意識の介在しない情動的コミュニケーションの水準で起こっている。このようにして、愛着をめぐる葛藤の存在によって母子間の情動的コミュニケーションが破綻することになる。

情動的コミュニケーションが破綻した母子コミュニケーションにおいては、子どもは気持ちの上では愛着欲求を抱きながらも、親の働きかけに沿って行動せざるをえなくなる。またひとりになって何かをしたいという思いを抱くと、親の働きかけに誘い込まれていく。その結果、自分の欲求は常に葛藤的になっていく。両価性 ambivalence の強まった心的状態ということが出来る。人間が本

来有する両義的心性が情動的コミュニケーションの破綻した状態にあっては、この例でわかるように両面的にならざるをえないのである。両義性は人間の心が本来有する自然な性質であるが、両義的心性は、対人コミュニケーションの破綻した状態、とりわけ情動的コミュニケーション形成の困難な事態によってもたらされた病理的心性として区別されなくてはならない。

6. おわりに

人間は本来両義的な心性を持つ存在であることを述べ、そのことによって母子コミュニケーションはどのような機相を呈するかを、愛着形成の成立の成否による情動的コミュニケーションの質的差異を示しながら論じた。愛着をめぐる葛藤が母子のどちらかに強く残存していると、情動的コミュニケーションは容易に深化せず、人間の持つ両義的心性は、強い葛藤を生み、それが次第に肥大して、ついには不適応行動や多彩な行動障害⁴⁾を呈することになる。

「自己」と「他者」は、本来最初から明確に区別されたものとして存在するのではなく、ヒトが人間になっていく過程で、養育者との心身共に一体となった関係の中で、両者が融合し浸透し合った関係の蓄積を通して、初めて浮かび上がってくるものなのであろう。このように人間は、つねに逆説的ともいえるような「自己」と「他者」が錯綜し合った関係の中で生きている存在である。

紙幅の関係から、青年期の行動障害や行為障害との関係については論じることができなかった。それは別の機会に譲ることにしよう。

文 献

- 1) 廣松渉, 増山真緒子: 共同主観の現象学. 世界書院, 東京, 1986.
- 2) 小林隆児: 関係障害臨床からみた自閉症の発達精神病理—接近・回避動因葛藤を中心に—. 小児の精神と神経, 40; 163-170, 2000.
- 3) 小林隆児: 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—. ミネルヴァ書房, 京都, 2000.
- 4) 小林隆児: 自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—. 岩崎学術出版社, 東京, 2001.
- 5) 鯨岡峻: 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房, 京都, 1997.
- 6) 鯨岡峻: 両義性の発達心理学. ミネルヴァ書房, 京都, 1998.
- 7) Richer, J. M.: Human ethology and psychiatry. In: (Ed.), van Praag. Handbook of biological psychiatry, Vol. 1. Dekker, New York, p.163-193, 1979.
- 8) Richer, J. M.: Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. Early Child Development and Care, 96; 7-18, 1993.
- 9) Schore, A. N.: Attachment and the regulation of the right brain. Attachment & Human Development, 2; 23-47, 2000.
- 10) Schore, A. N.: The effects of early relational trauma on right brain development, affect regulation, and infant mental health. Infant Mental Health Journal, 22; 201-269, 2001.
- 11) Schore, A. N.: The biological substrate of the human unconscious: The early development of the right brain and its role in emotional development. In: Developmental Perspectives, Children and Psychoanalysis, Monograph Series of the Psychoanalysis Unit of University College London and the Anna Freud Centre, Karnac, London (in press).
- 12) Siegel, D. J.: The developing mind: Toward a neurobiology of interpersonal experience. Guilford Press, New York, 1999.
- 13) Trevarthen, C.: Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In: (Ed.), Bullowa, M. Before speech: The beginning of interpersonal communication. Cambridge University Press, London, p.321-347, 1979. (鯨岡 峻, 鯨岡和子訳: 母と子のあいだ. ミネルヴァ書房, 京都, p.69-101, 1989.)
- 14) Trevarthen, C. & Hubley, P.: Secondary intersubjectivity: Confidence, confiders and acts of meaning in the first year. In: (Ed.), Lock, A. Action, gesture and symbol: The emergence of language. Academic Press, New York, p.183-229, 1978. (鯨岡 峻, 鯨岡和子訳: 母と子のあいだ. ミネルヴァ書房, 京都, p.102-162, 1989.)